

イヌワシとは

日本では、留鳥として北海道から九州の山岳地帯に生息していますが、森林の変化（伐採、植林、遷移など）やそれに伴う餌動物の不足、道路・ダム・送電線設置等の開発の影響などによって、徐々に生息域が狭まってきていると言われています。食物連鎖の頂点に位置しており、基本的には他の動物から襲われることはありません。

イヌワシのつがいは決まった行動圏を持ち、1年中そこで生活をしています。雄と雌のつながりが強く、相手が死ぬまでつがい関係を続けます。



イヌワシの飛翔

表 イヌワシの繁殖生態などの特徴

全長	雄 78.5～83.5cm : 雌 86～91.5cm	産卵	1月中旬～2月中旬に通常は2個産卵する。
翼開長	168～213cm		
体重	3～5kg	抱卵	約42～45日でふ化する。
視力	人間の8～10倍あり、高い空の上からでもヘビやノウサギを発見できる。時にはカモシカの幼獣を襲うこともある。	ふ化	3月下旬～4月上旬頃ふ化。日本ではふ化後、生き残るのは1羽だけのことが多い。
営巣	上昇気流の発達する断崖の岩棚に巣を造ることが多いが、大木に造ることもある。	巣立ち	5月中旬～6月下旬、ふ化後約70～80日で巣立つことが多い。

イヌワシの行動圏調査

当社では、イヌワシの生息分布調査や行動圏調査を行っています。日本における平均的な行動圏の面積は約60km²とされていますが、200km²を超える行動圏を持つつがいもいます。この広い面積を調査するため、猛禽類調査に熟練した調査員が複数の地点に散らばり、高倍率(20～60倍)の望遠鏡を使用して観察します。一度に長い距離を飛翔することがありますが、見えるぎりぎりの距離まで観察を続け、飛跡を記録します。また、羽の欠損、翼や羽の色合い等を観察し、それぞれの個体の特徴を識別します。超望遠レンズを付けたカメラを利用することもあります。これにより確実にその地域に定着しているつがいのデータを取得し、行動圏を明らかにします。

イヌワシの現状

現在、日本に生息していると推定されるイヌワシの総個体数は、500羽程度(175つがい)で、年々その数が減少しています。天然記念物であり、国内希少野生動植物種(国内で絶滅のおそれのある種)、レッドデータブック絶滅危惧IB類(近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種)にも指定され、法律で保護されていますが、その生息地の保護は必ずしも十分とは言えない状況です。

環境省のイヌワシ保護の取り組み

1994年、環境庁(現・環境省)はイヌワシ保護増殖基本計画の策定を行い、1995年にはイヌワシなどの希少野生動植物の保護増殖事業がスタートしました。イヌワシに関する主な取り組みは次のとおりです。

- 巣の点検及び補修
- ヒナの移入事業(里子作戦)
- 死亡原因調査と残留環境汚染物質の実態調査
- 繁殖阻害要因の現状とその分析

イヌワシは、主に岩棚や岩穴に巣を造ります。巣に適した岩棚が限られている場合は、落石などで現在利用されていない古巣を補修することも、保護(繁殖の維持)に有効と考えられています。

イヌワシの巣の点検及び補修

当社でも、イヌワシ保護の取り組みの1つである「巣の点検及び補修」を、国土交通省の事業において、猛禽類検討委員会の指導のもとに実施しました。

まず、イヌワシの非繁殖期において、近くでイヌワシが飛翔していないことを定点観察により確認しながら、当社所有のヘリコプターで古巣の様子を点検しました。

次に、補修が必要であると委員会により判断された古巣について、クライマーが懸垂下降技術を用いて断崖を降り、接近しました。他の野生動物も容易に近づけないような場所にありますので、困難と危険が伴う作業です。

巣の補修方法は、イヌワシの出入りを妨害している樹木の除去、長年堆積した古い巣材の除去、落石の除去等であり、それぞれの巣の状況に応じて対処しました。巣材の除去作業の最中に、巣の中からクロスズメバチの巣が出てきたこともあり、熟練したクライマーもさすがに慌てていました。

補修した場所では、今年はいヌワシの代わりにハヤブサが営巣し、3羽のヒナが巣立ちました。対象のイヌワシのつがいは他の営巣地を利用し、残念ながらここでは営巣は行われませんでした。今後、巣として利用してくれることを期待しています。



イヌワシの巣



イヌワシの巣の補修作業